

Moonlit Death

“Adonais”を中心として Shelley の詩の構成

輪 島 士 郎

§ 序

悲しみぬかれた悲しみは往々にして 創造性という 美しい翼を得る。Shelley の *Adonais* がそうである。彼は詩という器へ極限に達するまで悲しみを圧縮した。その結果、Keats の死なる一つの Weltlich な悲しみはその身にまとう一切の色彩を剝奪されて無色の neutrality にまで高められてゆく。この特定の次元は、この世に属するものにとっては依然死の世界以外の何物としてもうつらないが、Shelley の詩にあっては明瞭に新しい他の世界に通ずる高次の世界である。Shelley を読む者にとって、この事実の無視は致命的であると僕は考える。確かに、彼の詩が持つあの独特の澄明度は多くの批評家達によって例外なく第一に採り上げられ、云々されはしたけれども、それは伝統的な印象主義的 Shelley 論に止まり、その澄明度のもつ秘かな potentiality を手掛けとして更に高次の場にまで到達しなかったようである、といえ言過ぎであろうか。

Shelley は *Adonais* を最も満足すべき作品と考えていたことは事実だが、確かに、他の作品に無造作とも思われる位に断片的に散在している特質が、この詩にあって死の悲しみという触媒を介して集合している。だから *Adonais* に行くよりも先に他の作品を見なければならない。それは *Adonais* に対して僕が感ずる “ideational milieu” に実体を備えんがためという一見演繹的な過程をとることを意味することになるかも知れない。具体的に言えば Shelley のみ個有な Imagery を求めることが先決なのである。Shelley は言う：

Every human mind has what Bacon calls *idola specus* — peculiar images which reside in the inner cave of thought. These constitute the essential and instinctive character of every human being

(On Christianity)

本稿においても Shelley 独自の Image を有機的に取扱うことを以て一つの approach としたいと思う。

§ Planets と Prism-theme

或る意味で最も純粋な形で彼の Image が現われるのは *Prometheus Unbound* である。Act IV に *Moon* と *Earth* が duet をうたうが、それに先立って *Ione* が描く *Moon* の相貌は次のようである。

Within it sits a wingèd infant, white
 Its countenance, like the whiteness of bright snow,
 Its plumes are as feathers of sunny frost,
 Its limbs gleam white, through the wind-flowing folds
 Of its white robe, woof of ethereal pearl.
 Its hair is white, the brightness of white light
 Scattered in strings; yet its two eyes are heavens
 Of liquid darkness, which the Deity
 Whithin seems pouring, as a storm is poured
 From jagged clouds, out of their arrowy lashes,
 Tempering the cold and radiant air around,
 With fire that is not brightness;

(219-230)

不必要なまでに反復される“white”なる語は「月」の相貌をこと更に insubstantial なものにして印象を受けるが、それよりもまず僕は次の諸点を考えたい。

- (1) the brightness of white light of the Moon
- (2) the coldness and radiance
- (3) the fire that is not brightness

ここで想起すべきことは、Shelley が Newton の *Optics* を読んでいた事実とこの「月」の Image とは無関係ではないということである。これは Carl Grabo 教授が指摘したのであったが、Newton 以外にも、Laplace, Boyle, Cabanis, Bailly, Herschel, Davy, それに Darwin といった当時の科学者の成果に深い関心を持っていたことは疑いを容れない。そしてこのことは Shelley の詩にあらわれる Images の観察に新しい視点を与えるものである。

そこで第一に、“white light of the Moon”の white であるが、この white は自然色の一つである白ではないにしても、Ellis はこの場合“bright” or “clear”を意味すると説明している。しかしこの説明は殆んど意味がないと言わねばなるまい。Grabo 教授は前掲の一節の 5 行 6 行目を重視して、月に大気が無いのなら光線の屈折現象はなく光線は真直に反射されるだろうと示唆しているが、この概念の導入は注目に価する。真空、或は空気の非常に稀薄なとこ

ろでは光線は屈折せず、従って色彩の表出はない。換言すれば一切の色調を持つ光線も集合して無色に還元されるということである。この状態を Shelley は white として表現したのではないか。そうすれば the white light は colourless であり invisible であっても、そこに可能なあらゆる色彩をもつ光線が潜在しているというイメージが成立する。白光線は potentiality をもつのである。“the brightness of white light of the Moon” の brightness はこの potentiality を表出するものであろう。故にこの場合 white=bright という Ellis の説明は成立しないのである。第二の問題は月の属性としてあげられている the coldness and radiance である。“cold” であるということは熱をもたぬということに外ならない。月は光源でも熱源でもなく単に太陽の反射体であるという概念はこの詩人の好んで用いる概念であった。その次に “the fire that is not brightness” とは何であろうか。*The Cloud* の一節に次のような、やはり月の描写が見られる。

That orb'd maiden with white fire laden,
Whom mortals call the Moon,
Glides glimmering o'er my fleece-like floor,
By the midnight breezes strewn;

(45-46).

この white (=invisible) fire ということから考えても Shelley の意味するのは the ray that has heat but not brightness 即ち infra-ray であろうと想像される。そしてこれも月の potentiality を暗示するものである。

以上から refraction と potentiality という科学的作用を見たのであるが、僕はこの二つの作用を prism という具体的なイメージに結合したいと思う。Shelley が如何に有効にこのプリズムを彼の詩に導入したかは後に見るであろう。

Prometheus Unbound の Act IV には月の描写に続いて the Earth が描かれる。

And from the other opening in the wood
Rushes, with loud and whirlwind harmony,
A sphere, which is as many thousand spheres,
solid as crystal, yet through all its mass
flow, as through empty space, music and light:
Ten thousand orbs involving and involved,
Purple and azure, white, and green, and golden,
Sphere within sphere; and every space between

Peopled with unimaginable shapes,
 Such as ghosts dream dwell in the lampless deep,
 Yet each inter-transpicuous, and they whirl
 Over each other with a thousand motions,
 Upon a thousand sightless axles spinning,
 And with the force of self-destroying swiftness,
 Intensely, slowly, solemnly roll on,

(236-249).

この描写はあらゆる点で前掲のものと対照的である。*the Moon* の観察がその表面に限定されていたのに対し、*the Earth* のそれは深く内部に向けられている。その構造の如何に物質を構成する分子の運動に相似しているかは、当時科学界で問題となった Davy の *Elements of Chemical Philosophy* との関連の下に言及されて来たところである。とにかく、ここに見られる運動と色彩の多様性は澄明にして静的な月の描写と対峙するものと言わねばならない。crystal と見える solidity の内部から実は purple, azure, white, green, golden とあらゆる色彩をもつ orbs が露呈されるということに至っては、この Sphere 全体をプリズムで包んだ様態としか考えられないのである。いずれにしても“the other opening in the wood” という句から想像されるように森という暗黒の世界をはさんでその両極点に二つの planet が対置され、一方の planet 即ち月においては収斂して澄明となった光線が他方の planet 即ち地球において分解、発散してあらゆる色彩の光線となるという立体的構造は確かに暗示的であると言わざるを得ない。而もこの場合この二つの planet を結ぶ光線の方は *the Earth* ← *the Moon* でしかあり得ない。何故なら *the Earth* は無光源の深淵 (the lampless deep) と暗示されているからである。それでは月において一度収斂するところの光線は一体何処から来るのであろうか。言うまでもなくそれは *the Sun* からである。

この *the Moon* と *the Earth* はいずれも *Prometheus Unbound* の最後の Act IV にあらわれることは、既にみてきた通りであるが、ここに Shelley の劇構成の上の明瞭な一つの意図が看取されるのである。というのは彼が Act III までに対象として、又舞台として扱ってきた世界をこれらの具体的なイメージとして凝結したと考えられるからである。Drama というよりはむしろ poetry といわれる *Prometheus Unbound* にも彼独自の詩論が支える一つの秩序があったといえる。「詩の擁護」の中で彼はこういっている。

In the drama of the highest order there is little food for censure or

hatred; it teaches rather self-knowledge and self-respect. Neither the eye nor the mind can see itself, unless reflected upon that which it resembles. The drama, so long as it continues to express poetry, is a prismatic and many-sided mirror, which collects the brightest rays of human nature and divides and reproduces them from the simplicity of their elementary forms, and touches them with majesty and beauty, and multiplies all that it reflects, and endows it with the power of propagating its like wherever it may fall.

この詩人としての意識がこの drama を綜合するものとして Act IV に表われたものであることは疑う余地がないと思う。

II § 月 と 死

前節において *Prometheus Unbound* から月と地球とのイメージを選び出してこれを光線を媒体とする prism-theme として呈示し、これが Shelley の詩の構成と無関係ではないことを見たのであるが、次にこの prism-theme を手掛りとして *Adonais* に行きたいと思う。先ず最初に *the Earth* は、その付与された構造、運動、色彩の多様性という属性からこれをわれわれが属するところの *Leben* の世界を表示するものであると仮定する。他方 *the Moon* に関しては、これは *the Sun* の反射体として “the cold and uncertain and borrowed light” をもつに過ぎない。然しながら既に述べたように Shelley の詩にあっては必ず光源からの光は月での反射により地球に向い、そこにおいてプリズム的屈折と分析の結果、光線は色彩として表出されるのである。もし太陽からの光が直接何の媒介もなしに地球に照射されるなら地上の mortal souls は、その bright radiance に耐えられぬことになる。このような特異な situation は、この詩人の詩の随所にみられる。二三の例を拾うことにする。

their might
Exceeds our organs, which endure
No light, being themselves obscure.
(*The Sensitive Plant* III, 135-136)
I scarce endure
The radiance of thy beauty.
(*Prometheus Unbound* II, v, 17-18)
On the withering flower
The killing sun smiles brightly
(*Adonais*, XXXII)

更に *Adonais* には次のような一節がある。

he, as I guess,
 Had gazed on Nature's naked loveliness,
 Actaeon-like, and now he fled astray
 With feeble steps o'er the world's wilderness,

(*Adonais*, XXXI)

Actaeon が素肌の Artemis を垣間見することを許されぬように mortality をもつ地上の一切のものは Nature's naked loveliness を見る事が出来ない。この Nature は他の例からも容易に直観されるように *the Sun* と同じ位置を占めるものである。而して *the Earth* が mortality をあらわすのに対し、*the Sun* は *immortality* をあらわすものと仮定することが出来よう。従って次のような並行関係が可能である。(便宜上横の関係をそれぞれ S, T, 縦の関係を A, B の Notation であらわす)

(A)	(B)
Sun	EarthS
Eternity	LifeT

Prometheus Unbound では S, T の関係がその drama の内容、構成の裏づけとして基本的な形で呈示されていたが、*Adonais* においては次の有名な一節の如く、これらが完全な総合をとげている。そこでは最早 Keats という一人の詩人の死に止まらず、それより高次の世界が志向されている。但し重要なことは後で触れるように、それにはあくまでもその死が根底になければならないということである。以下その詩句を引用して若干の考察を試みようと思う。

The One remains, the many change and pass;
 Heaven's light forever shines, Earth's shadows fly;
 Life, like a dome of many-coloured glass,
 Stains the white radiance of Eternity,
 Until Death tramples it to fragments.

(*Adonais*, LII)

この部分を探り上げるに際しては例外なく Platonism が問題とされたのであるが、本稿において僕は一切それには触れずに単にその構成の点から考えてみたいと思う。そこでこの最初の4行は A, B の関係からみると、次のように分解されることは明らかであろう。

the One	the many
(A1)	(B1)
Heaven's light	earth's shadow
(A2)	(B2)
white radiance of Eternity	Life a dome
(A3)	(B3)

従来最も問題となってきたのは “Life, like a dome of many-coloured glass” についての解釈である。いろいろの見解があるが、W. M. Rossetti (*Adonais*, Oxford, 1903) はそれらを大体二つに分類している。第一の解釈は “glass” を “stained glass of various hues” と考えるものであり、第二の解釈はそれを “glass of a dome many-coloured by its prismatic refraction of the white light” とするものである。Rossetti 自身は第一の解釈は、あたらしい大切な象徴性を台無しにする (sadly reduces the importance of the symbol) ものとして認めず第二の見解をとっているが、これに関しては僕は Rossetti に全く同感である。ここにおいてこそ Prism-theme が意味をもってくるからである。というのはAの関係は一元性に立脚し、Bの関係は多様性に立脚して、それぞれ相対峙しているが、これから考えると (A3) を多元化するにはプリズムの機能による以外にないのである。何故なら (A1), (A2), (A3) はすべて *the Sun* のイメージであり (A3) の white は Ellis の言うように “dazzling, colourless to the imagination” であるから、その radiance は強烈な潜熱力をもつ太陽の眼に見えぬ光である。これに対し (B3) では、プリズムというドームに包まれて Life は、その色彩の多様性を帯びるのである。こうしてみると、A, B 共に 1-2-3 という段階は一種のヴァリエーションであり詩的 incarnation の段階を示していることになる。

次に

Until Death tramples it to fragments

が問題となるのであるが、ここで先に並列した S, T の関係にもどらねばならない。Sun—Earth というSの関係はそれ自身不完全なものであって、その中間に Moon が入らねばならないことは、その反射体としての機能から自明であろう。而してTにおける中間の位置を占めるものは、この最後の1行からして Death であることがわかるのである。

Sun — Moon — EarthS'
Eternity — Death — LifeT'

Adonais においてこの両者の関係は完全な unity をとげており、これを可能にするのがアドーネイス即ちキーツの死なのである。

§ Keats と lofty thought

さて月は死をあらわすものであることがわかったが、このイメージは *Alastor* の次の部分に最も美しく描かれている。

— and thus he lay,
Surrendering to their final impulses
The hovering powers of life. Hope and despair,
The torturers, slept; no mortal pain or fear
Marred his repose, the influxes of sense,
And his own being unalloyed by pain,
Yet feebler and more feeble, calmly fed
The stream of thought, till he lay breathing there
At peace, and faintly smiling: — his last sight
Was the great moon, which o'er the western line
Of the wide world her mighty horn suspended,
With whose dun beams inwoven darkness seemed
To mingle. Now upon the jagged hills
It rests, and still as the divided frame
Of the vast meteor sunk, the Poet's blood,
That ever beat in mystic sympathy
With nature's ebb and flow, grew feebler still:
And when two lessening points of light alone
Gleamed through the darkness, the alternate gasp
Of his faint respiration scarce did stir
The stagnate night: — till the minutest ray
Was quenched, the pulse yet lingered in his heart.
It paused—it fluttered.

(*Alastor*, 637—659)

“his last sight was the great moon” の great なる語は psychological な観点から解釈すべきであろう。何故なら死に際しての彼の全視野を占めるのが月であり、遂にはその二つの眼と同化されてしまうのである。又彼の血夜の脈打ちは月の惹起する nature's ebb and flow と律動を合わせ、最後に月の光が消えるとき彼の呼吸も停止する。このように外的に、内的にこの一人の死は完全に月によって表現されるのである。巧妙な描写といわねばならない。然し注目すべきことは、ここに描かれた死には生の躍動は終息してしまい、ただ stagnation のみが支配しているという事実である。そこには生の復活もないし、その志向さえも見い出すことは出来ない。然し Shelley は生の amelioration を信

じていたという Bowra の見解は興味あると思う。けだし次の一節はそれを示すからである。

And death is a low mist which cannot blot
The brightness it may veil. When lofty thought
Lifts a young heart above its mortal lair,
And love and life contend in it, for what
Shall be its earthy doom, the dead live there
And move like winds of light on dark and stormy air.

(*Adonais*, XLIV)

ここでいう lofty thought は生の amelioration を成就することを可能ならしめるものであることはわかるが、これだけでは余りにもその概念が漠とし過ぎる。然し Shelley の vocabulary の中では、この最も普通の語が往々にして重要な意味をもつのであり、ここでもそれが感じられるが、Rossetti はこの部分のパラフレーズを試みても単に “higher emotions” とか “noble thoughts and aspirations” とかいう語を使っているだけで、これでは充分意をつくしていないように思われる。又 Ellis はこれを “the exercise of the mental faculty” と説明しているだけである。僕は Shelley が「詩の擁護」の中で与えた詩の定義と関連づけて thought がもつ意味を探りたいと思う。

Every man in the infancy of art, observes an order
which approximates more or less closely to that
from which this highest delight results: but the
diversity is not sufficiently marked, as that its
gradations should be sensible, except in those
instances where the predominance of this faculty
of approximation to the beautiful (for so we may
be permitted to name the relation between this
highest pleasure and its cause) is very great.
Those in whom it exists to excess are poets, in the
most universal sense of the word;

彼によれば poetry は美に接近する能力を有し至高の喜悦を生み出す “cause” を現示するものである。僕の考えでは lofty thought とは poetry に他ならない。thought が同じような意義をもって現われる他の二三の例をあげよう。

- (1) High, spirit-winged Heart! who dost for ever
Beat thine unfeeling bars with vain endeavour,
Till those bright plumes of thought, in which arrayed
It over-soared this low and worldly shade,
Life shattered;

(*Epipsychidion*, 13-17)

- (2) In many mortal forms I rashly sought
 The shadow of that idol of my thought.
 And some were fair — but beauty dies away: (*Id.*, 267-269)
- (3) All he had loved, and moulded into thought,
 From shape, and hue, and odour, and sweet sound,
 Lamented Adonais. (*Adonais*, XIV)

前掲の *Adonais*, XLIV の一節とこの (1) にあらわれる thought は美への接近を志向し、(2), (3) の thought は至高の喜悦を生み出す “cause” を現示するものである。このように poetry には常にこの二つの側面があり、thought とはこの二つの方向に作用する意識を表現するものなのである。(1) の例ではこの thought は、低次元のこの世を飛び立とうとする鳥のイメージを与えられるが、bars of cage に翼を折られてむなしくくだかれてしまう。(2) においては詩人は逆にこの世の具象的な諸々の存在形式に thought の位置を見い出そうとするが、やはりむなしく終る。然し (3) にあげた *Adonais* の一節はその理想の状態が成就された様相である。ここで “he” とは勿論詩人 Keats を指している。Keats 程詩を構成するためにこの世の諸々の形相を愛し、それらの積重ねによって豊かなイメージを形成した詩人も少い、が然し彼はそれだけに止まらなかったのである。彼は美の真理たることを信じ、その不滅の美にまで自らを高めることを希求した。今やアドーネイスに転身した彼は永遠の一部と化し美の一部ともなってしまった。(*Adonais*, XXXVIII 及び XLIII 参照)

Adonais ではこの lofty thought は明瞭に形成力 (plastic stress) として表現されており、もっと積極的な機能を与えられている。Shelley によればこの世に存在する形相は一旦死に還元され然る後至高の美にまで形成されなければならない、何故なら実はそれらはこの世にあっては美と見えても至高の美の影に過ぎないから。この idea はプラトンのものであって Shelley のものとはいえないかも知れない。然し詩人はこの至高の美を *the Sun* として表現し、この世の生の様相をその光源から来る白光のプリズムの屈折による色彩の多様性とに表示したことにおいて依然詩人たることを失わない。詩人はまた死の様相を *the Moon* としてあらわし死は単に mortal eye が直接に見ることを許されないその美をやわらげられたものとして呈示する機能をもつ中間体とする。従ってこの世に存在するものは死を経なければ永遠性にまで達することが出来ないのである。この意味で死は機能的な存在に過ぎない。この世のものが死をモメントとして至高のものにまで高められると、最早死は存在の理由を失って

しまうのである。だから *the Earth* は “I am as a drop of dew that dies.”
といい、*the Moon* は “I am a leaf shaken by thee.” と告白しなければならない。*(Prometheus Unbound, IV)* このように生と死が滅されて総合的發展
段階をとげる過程は *Adonais* を得て初めて完全な詩的イメージに昇華され
た、Shelley は Keats という詩の二元性を備えた天才詩人の死に遭遇して強い
悲しみを体験しながらも、彼自身がもっていた詩的構成を完成させたのであ
った。

